

予算額

1,497,600 円

地域課題解決に向けた取組

取組の名称	少年体力づくり支援事業				
趣旨・目的	コーディネーショントレーニングによる基礎体力の養成を図る。				
内容	小学校の放課後を利用し、指導者を各学校に派遣し、ボールやカラーコーン・平均台など学校にある用具を使用して実施した。また、用具を使用しないハンドゲームなど気軽にできる運動も行った。				
対象者	小学生	参加人数	1200名	実施回数	47
1 効果を高めるための工夫や取組など	<ul style="list-style-type: none"> 室内で静的活動で遊ぶことの多い子供達にコーディネーショントレーニングを行いスポーツに関心を持たせスポーツ好きで健康な身体づくりを目指した。 				
成果	<ul style="list-style-type: none"> 子ども達の好きなドッジボールを初日と最終日に実施したが、子ども達の動きが俊敏になり、ボールに当たる子どもが少なくなった。 初めは出来なかった2つのボールを同時に使ったトレーニングが出来るようになった。 コーディネーション能力である目や耳など五感で察知し、筋肉を動かすといった一連の過程をスムーズに行うことができた。 				
課題	<ul style="list-style-type: none"> 低学年と高学年では理解力や運動能力が違うため、小規模校では一斉指導に限界があり、習得するのに時間がかかってしまった。年齢体力に応じたグループ分けによる指導が必要である。 				

取組の名称	中学校部活動並びに同好会活動の水泳支援				
趣旨・目的	小学生の時に水泳を実施していたが、中学生になり、水泳部がなく、希望しても水泳活動が続けられない中学生がいることから希望者を集め、水泳支援を行う。				
内容	練習前に目標を決めて活動に望み、練習後反省会を行う。公式試合出場を目指し飛込み、ターンなど技術的な練習を実施した。				
対象者	中学生	参加人数/回	40名	実施回数	8
2 効果を高めるための工夫や取組など	<ul style="list-style-type: none"> 水泳大会に出場する機会をもうけ、記録に挑戦させる事から目標達成の喜びを味わわせることにより、スポーツを続ける喜びと社会性の向上を図る。 				
成果	<ul style="list-style-type: none"> 目標であった公式試合に3名が出場し、自己ベストタイムを更新することができた。 				
課題	<ul style="list-style-type: none"> 近郊の中学生だけではなく、幅広い中学校にも参加を呼びかけたい。 土曜日しか開催していないため、開催曜日時間等集まりやすい日程に調整していかなければならない。 競技力向上にも関連があり、トップアスリート事業としても検討していきたい。 				

	取組の名称	幼児の親子ふれあい教室			
	趣旨・目的	水中運動会を通して、水中で親子のスキンシップを図ることで、水に対する親子の絆を深め、幼児期に多い水難事故防止を図る。			
	内容	親子で水中運動会を行い、玉入れやボール運び親子リレーなど普段の活動ではできない競技を実施。			
	対象者	親子	参加人数／回	90名	実施回数 3
3	効果を高めるための工夫や取組など	<ul style="list-style-type: none"> ・ 幼児期における神経系等を発達させ、身体を動かす喜びを感じさせる。併せて泳ぎの基礎である水中における身体の処し方を覚えさせる。 ・ スポーツの楽しさを覚えさせ、身体を動かすことの好きな子供たちを育てる。 			
	成果	<ul style="list-style-type: none"> ・ 親子が水の中でしか味わえない、肌と肌が触れ合う時間が多くなり、親子の絆作りが出来た。また、水に対する恐怖心の克服が出来た。 			
	課題	<ul style="list-style-type: none"> ・ 平日開催のため、保護者の参加が少なかった。 ・ 実施時期が遅れたことから寒さに対する抵抗もあり、夏場開催にすると良いと感じた。 			

小学校体育活動支援

派遣先学校総数	9 校
コーディネーター総数	3 名

◆効果を高めるための工夫や取組など

- ・ コーディネーター1名と補助指導員を含め、指導員を2～5名を学校へ派遣し、泳力や参加人数に合わせたグループ指導を効果的に行った。水泳実習では一斉指導で安全管理が中心のためプールに入る指導員の確保を図った。
- ・ 泳力の実態に応じた内容を段階をおって丁寧に指導を行い、子供達は水泳学習に楽しく取り組み達成感を味わうことができた。
- ・ 指導員は、一人一人の様子をよく見て、適切な言葉かけや補助を工夫しておこない、水に対する恐怖心を取り除き、水泳の楽しさを伝えることができた。

◆成果と課題

[成果]

- ・ 事前に学校の方で泳力に応じたグループ分けをお願いしたので、スムーズに実技指導が行われた。
- ・ それぞれのグループに指導員が1名～2名つき、各練習問題について一人ひとりの泳ぎをチェックしながら指導できた。
- ・ 泳力に合わせ、水慣れ、伏し浮き、腰掛けキック、クロール練習と段階をおって練習を行った。
- ・ 指導中でも子どもの様子を見て、上達の早い子はグループを移動し、指導を行った。
- ・ 指導を行った学校からは喜ばれ、次年度の指導を求められた。
- ・ 指導の仕方や補助、進め方など参考になると言っていた。
- ・ 着衣水泳等事故防止の学校では対応できない取組も行ったことから来年以降の実施の要望も出された。

[課題]

- ・ 低学年は身長が低いため、プールの水位を下げて指導したが深い部分に立つのがやっとの子どももいた。そのため、活動場所が限られ、やや狭い感じがあった。
- ・ 水泳用具の数が少なく、用具を交換しながら指導した。必要最小限の用具が必要である。
- ・ 水泳指導が9月から実施したことから、天候不順で水温も低下していたため、身体が冷え、時間的制約もあり、屋外プールとして時期的な限界もあった。

本事業全体の成果と課題

[成果]

- ・ 泳げない子ども達に、水に浮くことや泳ぐことの楽しさを伝える事が出来た。特に幼少期から水に親しむ事で水難事故防止に効果があった。
- ・ 部活動に入っている学校にプールがなく、試合にもでられない生徒が大会出場出来た。
- ・ 低学年におけるリズムやバランス能力を培う事に効果があった。
- ・ 運動を楽しめるよう配慮ができた。

[課題]

- ・ 学年に関係なく、指導を行う場合のプログラムを作成しなければならない。
- ・ 事業を行う前の事前PRの工夫が必要である。
- ・ 1年を通した事業は、子ども達の動きを記録に残し、各学校にフィードバックしていかなければならない。
- ・ 継続的に週の数回も配慮が必要であり、授業と課外活動の連携も必要である。
- ・ 各小学校長や教諭からは、体育活動への派遣回数を増やして欲しい、または継続して欲しいという声が多く聞かれた。
複数のコーディネーターの計上も認められ無いため、当クラブの負担として実施したが、より効果を上げるためには事業として認めてもらいたい。